

子どもたちにおはなしと音楽を届けに

—宮城県南三陸町を訪ねて—

ともだち文庫主宰 寺澤敬子（フォーラム会員）

去る4月1日に「東日本大震災チャリティーコンサート」（代表・新井裕子）が高崎シティーギャラリーコアホールで開かれました。私も、スタッフ・出演者の一人として参加しました。もちろん、5人の出演者と30名以上のスタッフはすべてボランティア。4月24・25日、チケット売り上げと募金全額すべて、そして会場に集まってくださった300人以上の方々の集合写真も持って、新井裕子さん、バイオリニストの小田原由美さんと私で南三陸町へお届けしてきました。こんなにたくさんの群馬の方が応援していますとお伝えしたくて…。



私は群馬県読み聞かせグループ連絡協議会の代表をしております。協議会では昨年、岩手県、宮城県の被災された学校や図書館等19施設に約二千冊の絵本や児童書を送る支援活動を行いました。ただ、本のお届け先を見つけることは、とても困難なことでした。何しろ、広範囲の複合災害により、行政機関そのものも被害を受けていたのですから。

最初に本を贈ることができたのが南三陸町入谷小学校でした。校長先生や被災地緊急支援員（元高校司書）の三浦てい子さんと何度も手紙のやり取りをし、絆を深めてきました。そこで、南三陸町の顔の見える子どもたちに、まず、今回の義援金を届けようということになったのです。

二日間で南三陸町の五校全小学校を回って義援金を贈呈し、「おはなしと音楽の集い」で子どもたちと交流を深めてきました。

子どもたちはバイオリンの生演奏は初めてらしく、透き通る音色に耳を澄まし心地よさそうに聴き入っていました。



読み聞かせに私が用意していった絵本は四冊。

『八方にらみねこ』武田英子文・清水耕蔵絵（講談社）。すて猫だった弱いちび猫が山猫に鍛えられ強くなっていくという話。修業をつみ、らんらんと目に力をつけた猫のアップの絵に「すご〜い」と思わず声をあげる子どもたち。

『はくちょう』内田麟太郎文・いせひでこ絵（講談社）。小さな池でたった一羽で傷をいやしている白鳥。傷が治り、いざ白鳥が飛び立つ日、奇跡が起こる。遠い旅を一羽で飛んでいかねばならない白鳥を思う池の気持ちで。二羽ではげまし合いながら飛んでいくラストの絵は圧巻。

『トンちゃんってそういうネコ』MAYA・MAXX作（角川書店）。足が一本ないシマシマのネコ、トンちゃんが主人公。困ることもあるけれど気にしない。雨がおちるのを見たり、風のにおいをかいだりと好きなことがいっぱいあるから。白黒のダイナミックな力強い絵に子どもたちは吸い込まれるように見入っていました。



この三冊から、勇気や自信、優しさなどを感じ取ってくれたらいいなと思い選びました。

楽しい一冊として『やさいのおなか』きうちかつ作（福音館書店）。いろいろな野菜の切り口が描いてあって、これは何の野菜かなと子どもたちに問いかけ遊ぶ本。「何の野菜かな？」と私が問いかけると、みんな元気いっぱい「ハイ」と手を挙げてくれました。「たまごです」、「やさいです」と自信たっぷりに答える子に会場は大笑い。筍の切り口を見て「魚で一す」。やっぱり海の子だなあ。

「一年半が経ち、やっと子どもたちは心の内を少しずつ表現できるようになりました」とおっしゃった校長先生の言葉が忘れられません。

入谷小学校は山あいであり、校舎の被害は無かったものの、多くの子どもたち、先生方の家が流され失われています。高台で被害を免れた志津川小学校には戸倉小学校が、伊里前小学校には名足小学校が間借りをして一緒に学んでいました。

どの学校の校庭にも仮設住宅が建ち、その向こうには人々の暮らしがあった町並みがすべてなくなって、灰色の大地の彼方に海が広がっているばかりでした。がれきは片付けられたものの、両脇の山際には自動車のスクラップが堆く積み重なり、仮設の商店が建てられたばかり。

名足小学校の菅原校長先生が被災した学校に案内してくださいました。一階の天井はメチャクチャになったパイプがむき出しの状態です。破壊のすごさを感じました。年内に修理を始め、「来年には、この名足に子どもたちを戻してあげたい」と熱っぽく語られました。

「震災の日、校庭で遊んでいた子が『海の水がない！底が見えるよ！』と叫んだので、全員が裏山に登り津波から助かった」との言葉は深く私の心に刻まれました。子どもたちや先生方、地元の方々に直接お会いしお話を聞いたことで、被災された方々の大きな不安や悲しみのほんの一部かもしれませんが、共有できたように思います。



支援のあり方はいろいろあっていい。

私にできることは、やはり本を仲立ちに子どもたちに寄り添っていくこと。

そして大事なことは、東北の地が元気を取り戻すまで応援し続けること。「忘れないでいます」というメッセージを送り続けることではないかと思っています。

《写真提供：寺澤敬子》